

特集「樽前 arty + が観た Still Living

～堀米和克編」

美術家・藤沢レオの個展「Still Living」が苫小牧市立美術博物館で開かれました。藤沢にとって過去最大規模の個展であり、作家として実像を伝える貴重な展示でした。藤沢が中心となり、美術展や教育現場でのワークショップを手掛けてきたNPO法人樽前arty+のメンバーが、個展を鑑賞し、それぞれの思いを随時、綴っていきます。

4回は樽前arty+理事であり、本個展の号外びとこまをびとこま記者と共に制作した堀米和克。

「アート作品の鑑賞の仕方に正解なんてないだろう」

先に代表理事である門馬羊次が語っている。

自分もそう思う。もちろん、最低限のマナーを守った上で、正面から、右側、左側から。それぞれどこから観てもそこからでしかわからない発見、興奮、魂をくすぐる違和感みたいのを感じとれるはず。

方法は人それぞれ。だから面白い。作家の作品に込めた想いの先、独自の鑑賞方法を見つけだせたら、儲け物だ。

大変おこがましいが、それらを踏まえたうえで、藤沢レオの作品もしゃがんで見上げたり、後ろにまわって見てみたりいろんな角度から楽しんでほしい。

「場の彫刻」シリーズを軸に洗練されたフォルム、そこに造り上げた空間、作品一つ一つ、いや、一つの作品に使われる素材一つ一つが脳裏に刷り込まれていくような感覚を覚える。

今回展示されている作品の中では、子供心、大人心をもくすぐる『不在の森』は、一番好きな空間だ。個体で見ると繊細だが、全体で見るととても存在感のある堂々とした振る舞いをしている。また、見ている人も作品の一部に見えてくる不思議な空間。その空間に一歩足を踏み入れた時の「うわっ」と驚く感じは個人的にはたまらない。

そして個人的にもう一つ注目してもらいたいのが入ってすぐ窓側に面した「場の彫刻」の作品。ビビットなピンクの壁面に青色の「柱」が描かれている。実はこの作品、藤沢レオ以外にも多数関わっている。小学生の「びとこま」記者をはじめ、大勢の方たちが一生懸命油性のボールペンで柱を塗った作品だ。その場にいた自分は、無我夢中で楽しそうに塗る子供や保護者たちの顔を鮮明に今でも覚えている。自分も微力ながら関わったので思い入れのある作品になった。

皆が、彼が作り上げる作品たちに見事に組み込まれていくような展覧会。ぜひ自分の目で、頭で、全身で感じていただきたい。



